

## 生活絵本に関する一考察

—乳幼児の生活様式の変容

川北 典子

(平安女学院大学)

### 1. はじめに

近年、乳幼児の生活様式は、多様化を極めているといわれる。もちろん、それが、現代社会におけるわれわれおとなの生活構造の変化に起因していることはいままでもない。だが、子どもの健やかな成長を考えると、そのような生活様式の変容が深刻な問題になっていることは、多方面から指摘されている。

ここでは、それらの問題を考察していくためのアプローチの一方法として、いわゆる「生活絵本」をとりあげた。そこに描かれた乳幼児の生活について、時代背景を踏まえながら検討していきたいと考えている。絵本は、乳幼児の生活に最も密着した児童文化財のひとつであるといえよう。乳幼児期に、誰もが一度は手にとって読むことのある書籍でもある。とりわけ「生活絵本」といわれる種類の絵本は、乳幼児の身近な「もの」や「ひと」を題材にして描かれるものであり、彼らの経験に基いた世界が展開される。また、絵本の歴史の変遷を考慮すると、ある意味では、生活絵本は、乳幼児の生活そのものを映し出す鏡のようなものであるかもしれない。

なお、絵本は、子どもをとりまく文化財のなかでも、不本意ながら消耗品として扱われることが多く、特に第二次世界大戦前のものについては残存しているものが限られる。そこで、本格的な絵本が誕生した明治期から、いわゆる赤本絵本が大多数を占めていた大正期の生活絵本については、現在実物を見ることのできるものの中から選んだ。また、戦後については、一定の量的まとめりや作品の傾向を配慮し、福音館書店を始めとする数社の幼児絵本をテキストとして用いた。

### 2. 生活絵本について

絵本は、いうまでもなく「絵」と「文章」とによって「もうひとつの世界」を創り出す複合芸術である。生活絵本の場合は、読者である乳幼児の日常生活に、より密接にかかわる作品となることから、その目的としては、乳児を含む幼い子どもが、身近な「もの」や「ひと」、そして「できごと」を絵本のなかで再認識

することが第一に挙げられる。いわゆる「ファーストブック」のなかでも、「ものの絵本」と並ぶ代表格とされている。

絵本の創造過程においては、まず、中川正文がいうところの第一次的創造者である絵本作家が、絵と文章とで表現するのにふさわしい内容をつくることから始まる。生活絵本の場合は、乳幼児の生活に密着した内容となるのが通常であるから、素材やテーマもそれに即した身近なものとなる。絵本のなかでも、特にリアリティが重んじられる分野であるといえよう。

第二次的創造は、絵本作家が創造した内容を絵でしか表現できない部分および絵で表現することが最もふさわしい部分を、画家が絵にすると同時に、文章でしか表現できない部分および文章で表現することが最も効果的である部分を、文章家が文章にするという段階である。生活絵本の文章については、やはり第一次的創造の段階と同様に、乳幼児が日常用いている身近な言葉で明確に表現される必要がある。また、絵は、抽象的なものよりも、乳幼児が理解しやすい写実的なものが適切であるといえるが、幼児期に入って想像する力が伸びてきた段階では、動物を主人公にするなど擬人化された絵や、多少デザイン化された絵にも親しみを感じられる場合がある。

第三次的創造は、印刷・造本という複製の過程であるが、「ファーストブック」における配慮事項がそのまま該当する。すなわち、絵本の安全性や耐久性の問題、本の大きさや形態、装丁、重量など造本にかかわる問題などが考えられる。

さらに、絵本の創造過程のなかでも最も大切な第四次の伝達の段階においては、生活絵本が主として幼い子ども向けであることを考慮すると、絵本を選択し手渡すおとなの存在が重要となる。乳幼児の日常生活において、同じ空間を共有し、体験をともにするおとなによって、生活絵本の内容はさらに密度の濃い深いものになると考えられる。

また、生活絵本の分類として、しばしば「あそび絵本」と「しつけ絵本」という分け方がなされる。「あそび絵本」には、「いないいないばあ」などの遊びを素材

にしたものや、わらべうたなどを用いて「うたの絵本」としてまとめたものなどがある。「しつけ絵本」は、乳幼児の主として基本的生活習慣にかかわるものを題材として、それらの確立を支援する内容となっているものが殆どである。いずれにしても、その基本には、やはり乳幼児の身近な「もの」や「ひと」がかかわっている。

### 3. 生活絵本と乳幼児の家庭生活

前述したように、生活絵本のなかには乳幼児の日常生活が如実に表現されることが多い。それらを検討することによって、彼らの生活のありようを時代的背景も含めて何らかの考察ができるのではないかというのが、本研究の目的であるが、とりあげた数々の作品について、詳細にかつ総合的に見ていくことは、当日配布の補足資料によって行いたいと考えている。

第二次世界大戦最中の1943年発行『幼稚園ノコードモ』（櫻井稔子・文 河島赤陽・画 榎本書店）には、園児の幼稚園での生活とともに、降園後の家庭における生活の様子も描かれている。両親と子ども2人の家族4人で食卓を囲み（ユウハン／タノシク／イタダイテ）、その後、子どもたちは歯磨き・脱衣を自ら行う（ネンネノ マヘニ／ハラ ミガキ／キカヘタ フクハ／タタミマセウ）。時計の針が8時を指す前に、子どもたちは両親の前に手をついて挨拶し（トウサマ／カアサマ／オヤスマナサイ／シヅカニ タノシイ／ユメノクニ）、ベッドで眠りにつく（ネダイノ／オフネデ／マキリマセウ）。

裏表紙には、「お母様方へ」と題して、「幼稚園の子供達、その日々の生活は、すべて皇國民の基礎錬成に外なりません。大きくなつてから、お國のお役にたつ様に、お國の寶を立派に育てませう。御家庭にあるお子達も、幼稚園の児にまけないよい子になつて頂きたい、かうした願ひからこの一冊をお子様方にお贈りいたします。」と述べられている。1943年という戦局厳しい時期に、幼稚園での伸びやかな子どもたちの笑顔、一家団欒の様子が描かれた絵本が出版されていることを、どのように捉えればよいのだろうか。一方で、戦争によって親をなくした子どもたちが、街頭や停車場で、花や絵本などの物売りをする姿も目立ちはじめた頃であった。

また、1970年代に出版された、わかやまけん作の「こぐまちゃん絵本」シリーズ（こぐま社）は、30年経った今も読み継がれている作品であるが、親しみ

やすい熊の子のキャラクターを用いて、幼児の日常生活を明快に描いている。1973年出版の『こぐまちゃん おやすみ』は、「8じです／てれびは おしまい／ぱちん」で始まり、「もう ねるんだ／ぼく ひとりで ふく ぬげるんだ」と、主人公こぐまちゃんが、自分の力で、タンスからパジャマを出して着替えを行い、「おかあさんに いわれないうちに」歯磨きをする様子が描かれている。その後、父親とすもうをとって遊び、母親と絵本を読んで眠りにつく。

前述の2作品は、その背景に戦中・戦後という大きな時代差があるものの、生活絵本として描かれている、子どもの日常の生活様式にそれほど変化はない。そういう意味では、生活絵本のなかには、時代を経ても大差のない子どもの生活習慣が、おとなの深い思い入れによって描かれていると考えても良いようである。

### 4. おわりに

現代の子どもの生活様式や生活構造の変容には、当然のことながら、子どもをとりまく家庭環境の変化が大きな影響を及ぼしている。とりわけ、乳幼児の場合には、良きにつけ悪きにつけ親を始めとする家族の生活様式に大きく左右される。

一方、絵本の創造には、多くの場合、読者である子どもに対する作者の思いが根底に流れている。それらは、子どもたちの健やかな成長・発達に向けての作者からのメッセージであり、作品のテーマであると考えてよいだろう。特に、生活絵本においては、幼い子どもの衣・食・住を中心とする、日常生活に関連した内容が展開されるということが多いため、作者の思いは、より明確なかたちで表わされている。なかでも、「しつけ絵本」には、それが顕著に見られた。食事のマナー、睡眠時間の確保、衣服の着脱および排泄習慣の確立など、それらは、あたかも、本来の読者である子どもたちに対するものというより、むしろ、現代の母親や父親に向けて発信されるメッセージのようである。

生活絵本に描かれた乳幼児の姿と、現代社会に生きる子どもたちの日常生活。今後、理想と現実の狭間をいかにして埋めていくかが、子どもたちの生活構造を見直していくうえでのキーポイントのひとつであると考えられる。また、絵本の側から考えれば、それができなければ、日常からかけ離れた内容の生活絵本は、子どもにとって、何ら意味のないつまらないものになってしまう可能性があるといえる。